



ドストエフスキーからレヴィナスへ：
『おとなしい女』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 俊治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006182

ドストエフスキーからレヴィナスへ

— 『おとなしい女』をめぐって—

萩原俊治

はじめに

ドストエフスキーを長年読んできた者の目から見ると、レヴィナスはドストエフスキーを読むことによって自分の思想の正当性を確認しているかのように思われる。たとえば、レヴィナスが第一主著『全体性と無限』で唱えた「顔」という概念は、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』で述べようとしている事態を言い換えたものにすぎない。言い過ぎだろうか。たしかに、レヴィナスが「顔」という概念で述べようとしている事柄は、他の人々、たとえばルオーなどもすでに述べている。

世に生きとし生けるすべてのものに敏感な芸術家は、まっくらな暗黒の中でも、この敵意と憎悪の時代の中でも、たくさんの荒れすさんだ顔、重荷に曲った背中に会いに出ていく。こんなにたくさん、見える或いは隠された悲慘にもかかわらず、かれは、決して絶望してはならない。明日もまた、英雄、殉教者、また聖者が出るだろうことを、そしてまた人を感動させるかくれた或いは無視された犠牲が続くであろうことを、信じなければならぬ。¹

人間の「顔」のもつ悲惨さ、貧困、老いなどはルオーが繰り返し描いたものであった。私たちの誰もが悲惨であり、貧困と隣り合わせ、あるいは、貧困のただなかに居り、弱く、老いに向かっているのだ。ルオーは自らの絵によってそのような事態を私たちに告げながらも、同時に、その絵の中で「人を感動させるかくれた或いは無視された犠牲が続くであろうことを、信じなければならぬ」と述べているのだろう。従って、レヴィナスがルオー、あるいはルオーと同様の思想をもった人々から影響を受けたということは十分考えられる。また、レヴィナスがルオーと同じ方向に歩んでいるということも明らかだ。しかし、画家ルオーと哲学者レヴィナスの思想の共通点は、ここまでなのである。これに対して、レヴィナスとドストエフスキーは、一方は哲学者、一方は小説家という違いはあるにしても、ほとんど同じ事柄を異なった言葉で述べていると言っても過言ではない。これ以降の諸論考で私はそのことを明らかにしてゆくだろう。しかし、本稿ではドストエフスキーの短篇『おとなしい女』を取り上げながら、かんたんに、レヴィナスとドストエフスキーが共有する思想のもっとも重要な点を述べるだけにする。そのもっとも重要な点とは、レヴィナスのいう「外部性」のことだ。

サド＝マゾ・プレー

『おとなしい女』を読む者は誰でも、それが一種のサド＝マゾ・プレーだということに気がつくに違いない。誰がサディストでありマゾヒストなのか。もちろん、それは主人公の四十一歳になる男であり、そのサド＝マゾ・プレーの相手になるのが十六歳の妻である「おとなしい女」である。サディ

¹森有正「ルオーについて」、高田博厚+森有正『ルオー』所収、筑摩書房、1976、p.195

ズム、マゾヒズムの解釈をめぐってはドゥルーズをはじめ、さまざまな解釈があることは承知しているが²、ここではごく平凡に、サディズムを相手を操作・支配することに性的喜びを覚えること、マゾヒズムを逆に、相手に操作・支配されることに性的喜びを覚えること、という風に定義しておく。

男はどうしてその十六歳になる女性に魅せられ結婚したのか。それはフロイトのいう「無垢のナルシズム」に惹かれたからだ。フロイトは『ナルシズム入門』の中で、女性が男性に恋着されるためには美しくあるだけでは不十分であり、その女性が「無垢のナルシズム」に満ちていなければいけない、という。

つまりはっきりと認められるように思われるのは、ある人物のナルシズムは、自己のナルシズムを最大限に放棄して対象愛を求めようとしている他のひとびとにとっては非常な魅力をもつものだ、ということである。小児がもっている魅力の大部分はそのナルシズムや、自己満足や、近づきがたさにもとづいているのであり、われわれのことなぞ眼中にないようにみえるある種の動物、たとえば犬や巨大な肉食獣などの魅力もこれと同じであって、それどころか、極悪人や滑稽家などが文学作品のなかでわれわれの興味をそそのかさえ、それは彼らが自分の自我を傷つける一切のものを遠ざけておくすべを心得ている、ナルシズム的な首尾一貫性によるのである。これはまるで彼らが幸福な心的状態を保持し、われわれ自身がすでに放棄してしまった不可侵なリビドーの状態を保持していることを、われわれがうらやんででもいるかのような有様なのである。³

もっとも、ルネ・ジラルールはフロイトのこのような主張を誤りとして退ける。すなわち、フロイトのいう一次的ナルシズムは生存本能として理解できるが、「無垢のナルシズム」のような二次的ナルシズムは存在しないという⁴。ジラルールによれば、二次的なナルシズムというものが存在するのではなくて、われわれの模倣の欲望が存在するだけなのである。あたかも自己充足し、ナルシズムに満ちているかのごとく見える、美しい女性、立派な男性、可愛らしい子どもにわれわれが魅力を感じるの、彼らが他の者たちからほめそやされ、他の者たちの欲望の対象になりうるからだ。この他者というモデルであると同時にライバルである者の欲望を、われわれは模倣し横取りする。このわれわれの欲望が、美しい女性たちを、あたかもナルシズムに満ち、自己充足していると錯覚させる。

理論的にはジラルールのいう通りだろう。二次的なナルシズムはじっさいには存在しない。それは幻想なのだ。しかし、『おとなしい女』の主人公の自己中心的な視界から見れば、彼にとって、そのようなナルシズムが存在していることは明らかだ。このため、彼は相手の女性に「無垢のナルシズム」を感じ、恋着する。それを模倣の欲望だと気づかせない彼の自己中心性が、彼をその欲望に駆り立てているのだ。従って、主人公の欲望を理論的に説明するために、フロイトのいう、素朴とも言

*2ドゥルーズはサディズムとマゾヒズムが反転可能だとしたフロイトを批判しながら、フロイトのいう「超自我」と「自我」にサディズムとマゾヒズムがそれぞれ対応しているので反転不可能なものだという（ジル・ドゥルーズ『マゾッホとサド』、蓮見重彦訳、晶文社、1973、p.151）。一方、ルネ・ジラルールはサド＝マゾヒズムをフロイトと同様、反転可能なものとしながらも、フロイトとは異なり、両者とも模倣の欲望から生じたものだとする（ルネ・ジラルール、『世の初めから隠されていること』、小池健男訳、法政大学出版局、1984、p.530）

*3『フロイト著作集』、懸田克躬、吉村博次訳、第五巻、人文書院、1986、p.122

*4ジラルール、『世の初めから隠されていること』、pp.583-606

える「無垢のナルシズム」を適用することができる。

しかし、「無垢のナルシズム」だけでは、主人公の欲望を説明できないことも明らかだ。なぜなら、主人公は「おとなしい女」に惹かれると同時に所有したいと望んでいるからだ。ここには明らかに、その女を操作・支配したいという欲望が働いている。これは「無垢のナルシズム」だけでは説明できない。男はこんな風にいう。

彼女の置かれている状態があまりにも恐るべきものであったのに、先ほどあんなふうにな彼女が笑ったり、私の言ったメフィストフェレスの台詞に関心を示したりできたりしたということが、私には理解さえできないほどであった。しかし、これが若さというものだ。私は誇りと喜びをもって、そのとき、彼女のことをまさにそのように考えたのである。なぜなら、そこにはおおらかな心があったからだ。破滅の淵にあってもゲートの偉大な言葉は輝くのである。若さというものには、たとえそれがほんのわずかであろうと、歪んだものであろうと、おおらかなところがある。いや、これは彼女のこと、彼女ひとりのことを言っているのだ。そのとき私は彼女を<私のもの>として眺め、私の力に疑いは抱いていなかった。もう疑いをもたなくなったときの、この何とも言えず官能的な思いというものはお分かりであろう。^{*5}

繰り返すと、主人公がその女性に惹かれたのは、その女性がナルシズムに満ちた者であるかのように見えたからだった。しかし、その女性を所有し、操作・支配できると分かったとき、彼の喜びは頂点に達すると同時に、彼女への恋着は終わりを告げる。恋の喜びが操作・支配の喜びに入れ替わる。こうして彼女に対するサディズムが開始される。このような欲望はフロイトのナルシズム論では説明することができない。それは、恋着の過程を明らかにするだけだ。従って、ここではサディズムとマゾヒズムを反転可能なものとするフロイトあるいはそれを精密化したジラルールの理論によって事態を説明する他はない。なぜなら、主人公のサディズムはのちに見るようにマゾヒズムに反転するからだ^{*6}。

ところで、「おとなしい女」を所有すべき他者と見ている主人公には重大な錯誤があると言うべきだろう。私たちは自律的な存在である他者を所有することはできない。私たちは他者と出会うことしかできないのだ。肥大した自尊心、あるいは肥大した自我中心性にとらわれた主人公はそれを理解することができない。結婚した後、「おとなしい女」を徹底的に操作・支配しはじめる。女は追いつめられ、苦しみあまりピストルで男を殺そうとするが、失敗する。そして、男と家庭内離婚のような形で暮らし始める。

男はその自己中心性のために、罪を悔いて殻に閉じこもっているのだと思う。しかし、妻の方は、もう夫とは何の交渉ももたず、一生このまま暮らせたらよいと願っていた。妻という形ではあるが、

^{*5}Ф.М.Достоевский, Полное Собрание Сочинений в 30 томах, т. 24. Л. 1982. (以下の引用も同じ)

^{*6}「主体は、モデルとの関係によってつくりあげる舞台で、自分の役割、犠牲者の役割を演ずるでしょう。そしてそれが、いわゆる（フロイトのいう：萩原）二次的マゾヒズムです。主体はまた迫害者でもあるモデルの役割を演ずることもあります。そしてそれがサディズムと呼ばれるものです。そこで主体はモデルの欲望を真似るのではなくて、モデルそのものを、それからさき選択の主要な基準となるものとして真似るのです。つまり、主体がまだ対象として狙う可能性のあるものすべてに激しく反対するものとして、真似るのです。」（ジラルール、前掲書、p.530）

たんなる同居人として暮らしたかったのだ。貧しい家の出身である自分には、この家を出て暮らしてゆけるあてはまったくない（十九世紀ロシアの話だ）。一方、夫との暮らしをもとの新婚当時のような形に戻したところで、再び同じように操作・支配される関係に追いこまれるだけだ。しかし、夫はあくまで勝ち負けにこだわり、妻が自分の非を認めるときを待っている。この自負心はある偶然によってあえなく崩れ去る。彼は妻が仕事をしながら静かに歌っているのを耳にする。「歌っている、それもおれのいるところで。彼女はおれのことを忘れたんだ。何てことだ。」彼は妻が自分をまったく必要としていないこと、自分とは隔離された現在の暮らしに満足していることを知る。

ひびの入ったような貧弱でとぎれとぎれの歌声が、不意にまた私の魂の中で響きはじめた。私は息がつまった。落ちたのだ。目から覆いが落ちたのだ。私のいるところで歌いはじめたということ、つまり私のことを忘れてしまったということだ。これは明らかで恐ろしいことだ。頭ではそう思った。しかし、私の魂の内では歓喜が輝き、恐怖を圧していたのだ。

もちろん、妻がひとり、ぼつねんと歌を歌っていること自体が男を驚かせたのではない。あたかも精神分裂病者の言動をわれわれが了解できないように、男には妻の歌を歌うという行為がまったく了解できなかったのである。それは場違いであると同時に、妻はその歌を歌うという行為によって、夫とは全く異なった場で生きているということを一挙に知らせたのだ。妻は自分の手の届かないところに生きている。自分で自分の生活に満足しているのだ。妻はもはや男の操作・支配の及ばないところにいるのだ。男はこうして再び、妻の「無垢のナルシズム」に魅惑される。所有することによって失っていたものに再び会うのである。

男は一方向的に妻に求愛する。もう自分のことは虫けらか何かのように扱ってくれるがいい。おれはお前の所有物であって、取るに足りない存在なのだ。ただ、そっとお前を見ることだけは許してほしい。おれはお前に比べれば、まったく下らない何の価値もない人間なのだから。こうしてサディズムがマゾヒズムに変換される。自分を魅惑している相手进行操作・支配することが不可能になったいま、逆に、相手に所有され、操作・支配されること以外に、その「無垢のナルシズム」に満ちた存在に近づく方法はない。男は操作・支配の関係しか思いつくことができない。この新しい方法を思いついた男の喜びは、またもや頂点に達する。

「では、あなたにはまだ愛がご入用なのね？愛が？」まるでこの驚きの中で不意にそう問いかけられたようだった。もっとも彼女は黙っていたのだが。しかし、私はすべてを読んだ。すべてを。私の中であらゆるものが揺り動かされ、そのままいきなり彼女の足もとに崩れ落ちた。そうだ、私は彼女の足もとに倒れこんだのだ。彼女はさっと飛び退いたが、私はギリギリと彼女の両手を握りしめていた。

そして私は自分の絶望を完全に理解しようとしていた。おお、理解しようとしていたのである。しかし、信じてもらえるだろうか、私の心には歓喜がわきたち押さえきれないほどだったので、自分はこのまま死ぬのではなからうかと思ったほどなのだ。私は幸福のあまり有頂天になって彼女の足に接吻していた。そうだ、幸福、それも計り知れないほどの限りない幸福にひたりながらも、どこにも出口のない自分の絶望をすっかり理解していたのである。

男は妻に魅惑されながらも絶望している。妻は自分を所有してくれないだろう。それにも拘わらず、

男は自分を所有してくれるよう妻に強要し続ける。こうして悲劇が起きる。「おとなしい女」は追いつめられ、アイコン（聖像）を抱いて窓から身を投げる。

外部性

「おとなしい女」はなぜ死を選んだのか。それは、もはや夫との操作・支配の関係の中で生きてゆくことができなかったからだ。操作・支配の関係の中に「いのち」はない。生命には二種類がある。私たちの肉体そのものである物質的生命と関係の中で成立する関係としての生命だ。関係としての生命は、木村敏が言うように、私とあなたのあいだに「あいだ」がなければ成立しない⁷。操作・支配の関係においては、私とあなたのあいだに「あいだ」はない。操作・支配される私あるいはあなたは、私あるいはあなたの延長でしかない。レヴィナスの言葉で言えば、それは私あるいはあなたが、私あるいはあなたに「我有化」されるということだ。このとき「あいだ」は消滅し、「あなた」も存在しなくなる。存在するのは「私」だけだ。自己中心性によって構成される世界。ここでは関係としての生命は成立しえない。この木村のいう「あいだ」がレヴィナスのいう「外部性」なのである。木村はある離人症患者Nについて次のようにいう。

Nが「紛れもない他人」の実感と表現しているもの、それはレヴィナスがautruiと読んでいる主体他者の他者性のことにはかならないだろうし、われわれの言いかたでは、「あいだ=いま」の場所で出会ってくる個別的他者の奥行きのことだろう。つまりそれは「現象=いま」の空間で普遍的に「私でないもの」であるところのl'autreとは、次的に異なったものである。離人症で「あいだ=いま」の場所が消去されると、autruiはその「親密な欠如」という性格を失い、おしなべて「親しみの深さが均一」であるようなles autres（他者たち）でしかなくなる。それらは、客観的には他人であるのに、主観的には「自分の身体の延長上」であって、客観的には外部にある「鏡の中の自分」と変わらなくなる。⁸

簡潔な表現なので、木村が述べていないことを補足しながら説明を加えてみよう。木村によれば離人症患者はもっぱらレヴィナスのいう「光の世界」に住むことを余儀なくされている。レヴィナスのいう「光の世界」とは、かんたんに言えば、主体の自己中心性によって成立する世界のことであり、〈他〉を〈同〉に還元する存在論、すなわち西欧哲学のことである⁹。この存在論においては、「他者」は存在し得ない。「他者」は「私」の支配下にあり、「私」の視線の光のもとでその姿を現すだけだ。ソクラテス以来、この存在論に固執してきた西欧哲学には「他者」は登場しない。そこに現れる他者とは「私」のことなのである。レヴィナスのいう「光の世界」とは、このような存在論的な世界のことだが、木村は、離人症患者においては、それが極限にまで押し進められ、個人的な病理として発現していると見る。

木村は一方でサルトルを、一方でシュツツを批判しながら、両者を包含する形で議論を展開する。すなわち、他者の不可知性を強調するサルトル（『存在と無』）と、主体とベルグソンの「持続」を共有する親密な他者というものを強調するシュツツ（『社会的構成の意味構成』）を、いずれも真

*7 木村敏『あいだ』、弘文堂、1988/木村敏『生命のかたち／かたちの生命』、青土社、1995

*8 木村敏『分裂病と他者』、弘文堂、1990、p.164

*9 レヴィナス『全体性と無限』、合田正人訳、国文社、1989、pp.45-49

の他者像を捉えていないとする。そして、サルトルのというような不可知性に満ちた他者と共有する時空間を「現象=いま」と名づけ、シュッツのというような親密な他者と共有する時空間を「あいだ=いま」と名づける。離人症患者においては、他者との「あいだ=いま」によって生じる親密さが感じられなくなり、患者にとっては、もっぱら「現象=いま」としての他者しか存在しなくなる。このため、離人症患者Nは他者を「紛れもない他人」と感じるのにも拘わらず、その他者に対して何も親密さを感じることができない。木村はこのような患者の状態を、「「所記」を奪われた「能記）」という。要するに、意味するものが跳梁するだけの世界に患者は生きている。これがレヴィナスのいう自己中心的な「光の世界」を極限まで押し進めたものであることは明らかだろう。ここには「他者」は現れず、従って、レヴィナスのいう「外部性」も現れない。この外部性が木村のいう「あいだ」（あるいは「あいだ=いま」）なのである。この外部性の象徴であるアイコンを抱いて、「おとなしい女」は窓から身を投げる。

「おとなしい女」の夫はもちろん離人症患者とは言えない。しかし、彼は肥大した自尊心をもち、自己中心の世界に生きていた。もっぱら自己中心であれば、外部性は破壊されてしまう。そして、私たちがその自己中心性から抜け出してゆくとき、「私」の前に「他者」の「顔」が現れる。そのとき、「私」と「他者」のあいだに「外部性」が現れる。【おとなしい女】の悲劇は、最後までこの外部性に気づくことができなかった男によってもたらされた悲劇だということができるだろう。

ところで、後期ドストエフスキーの作品、特に【カラマゾフの兄弟】には、この「おとなしい女」の夫のような「外部性」に気づくことのない登場人物の群と、それに気づいている一握りの人々が登場する。たとえば、【カラマゾフの兄弟】の中で、それに気づいているアリョーシャはリーザに次のように報告する。

「あのね、リーザ、あるときゾシマ長老がぼくにこんなことを言ったんだ。人間というものはたえず子どものように世話をしてやらなければいけないってね。」（【カラマゾフの兄弟】第五編）^{*10}

これはそのままレヴィナスの「顔」というものに通じる言葉だ。誰もが無力な子どものようにさまざまな暴力に取り囲まれている。その暴力は私たちが「他者」というものに会わず、自己中心性の中に閉じこもっていることから生じる。このため誰もが暴力にさらされる運命にある悲惨な子どものような存在なのである。これについては稿を改めて論じることにしよう。

*10 Ф.М.Достоевский, Полное Собрание Сочинений в 30 томах, т.14, с.197, Л.1978.